

経営データの可視化を進め 院内はもちろん「名古屋第一病院」や 地域との共有も視野に入れる

関塚永一

セコム医療システム株式会社顧問
国立病院機構埼玉病院名誉院長
慶応義塾大学医学部客員教授

前号でも紹介したとおり、日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院は国際的な病院認証機関JCI（Joint Commission International）の認証を取得するなど、医療の質の向上にあたる可視化に取り組んできたが、経営についても同じだ。自院の経営はもとより、地域間連携についてもデータによる可視化に取り組んでいるが、そこでフル活用しているのが「セコムSMASH」だ。その活用法を紹介する。

入門者からベテランまで
満足できる幅広さ

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院が経営データ分析ソフト「セコムSMASH」を導入したのは2018年のことだが、当時から今に至るまで、同院の経営分析をほぼ一手に担ってきたのが、経営企画課の橋本知紀係長だ。導入前も他の2社のソフトを用いて経営分析データを作成していたが、視覚的要素を踏まえたものに仕立てるためのルーチン業

務は膨大で、いつも提出期日ギリギリまで作業に追われていたという。そこへ、佐藤公治院長から紹介されたのが「セコムSMASH」だった。実際に使った橋本係長が、「これ1つで十分です」と幹部会議で伝えると、「橋本係長がそう言うなら」と導入が決まったという。橋本係長には評価できるポイントとして、グラフなど視覚に訴えるデータ提示が容易になったこと、「セコムSMASH」に表示される画面を大画面モニターに映し出せばそのまま会議に使えるなど

使い勝手が良いことに加え、ユーザーのレベルに応じてさまざまな切り口のデータを揃えることが可能な点も挙げていただいている。操作が簡便なので、パソコンを使い慣れていない人や病院データ分析に長けていない人でも一通りのデータを揃えられるうえ、「セコムSMASH」のクエリ機能を用いれば、独自の分析をいくらかでも行える。「視覚的にどのボタンを押しても結果が出るので、入門者向けソフトのイメージを抱きがちですが、使い込めばその分、深

モチベーションを
引き上げるデータ分析

現在、経営企画課では毎月25日には最新のデータ分析を提示し、院内の戦略委員会でも、最新動向を報告しているが、橋本係長のもとには連日、多くの診療部長が訪ねてきて、自部門の様子を聞いているという。特に同院は新型コロナウイルス感染症の患者受け入れ

地域でデータ共有を進めより
良い共生関係を追求

現在、用途は院外にも広がっている。まず、同じ日本赤十字社愛知医療センターとして経営戦略を共有することになった名古屋第一病院も「セコムSMASH」を導入することになり、これによって

域内での病院間の競争はナンセンスという雰囲気広がりがつつあります。病病連携、病診連携を進めて、たとえば複雑な疾患は大学病院に対応していただき、そうであれば当院で引き受けるといった役割分担を加速させる必要があります」と語る。

の役割だと思っています（橋本係長）
近隣の病院で集まって独自の勉強会を開くなど、その機運は高まる一方だという。確かな患者動向を示したデータに基づく連携のあり方を追求する名古屋第二病院に注目したい。



経営企画課の橋本知紀係長

「セコムSMASH」はその点、議論のなかで特定の疾患患者の動向が持ち上がった際にもクエリ機能ですぐにデータを表示できる特徴がある。「データはモチベーションを上げるために使いたいと思っていますが、その用途にも応えてくれます」と、橋本係長は語る。

前回の連載で佐藤院長が地域連携の強化を課題の一つに挙げていることを紹介したが、橋本係長はその実働役を担う一人である。「地

域内での病院間の競争はナンセンスという雰囲気広がりがつつあります。病病連携、病診連携を進めて、たとえば複雑な疾患は大学病院に対応していただき、そうであれば当院で引き受けるといった役割分担を加速させる必要があります」と語る。

地域を見える化し、機能分化と協働を実現！ セコムSMASH「ポジショニング機能」 ※各診療科・疾患ごとの分析も可能

整形外科 退院患者所在地 入院経路別分析（直近3ヵ月）

